

〔イモの技術誌 その2〕

1 億総腹ぺこ時代の命綱「沖縄100号」



西尾 敏彦*

せつなくなつかしい「沖縄100号」

ずいぶん昔になるが、農業技術史についてなにか書いてみようと思ったとき、まず頭に浮かんだのがサツマイモの「沖縄100号」だった。

「沖縄100号」といっても、今の若い人にはなんの感慨も浮かばないかもしれない。だが、食いざかりを戦中戦後の食料危機の時代に過ごした私たちの世代にとって、これほど記憶に残る食べ物はな^い。今考えてみると、私が「品種」というものをはじめて意識した最初の農作物が、この「沖縄100号」だったように思える。「沖縄100号」は私たち世代にとって、せつなくなつかしい思い出の食べ物なのである。

幻の小禄試験地

サツマイモ「沖縄100号」は、昭和9年（1934）、沖縄県農業試験場小禄^{おろく}試験地で、松永高元^{まつながたかもと}らによって育成された。

小禄試験地は昭和元年（1926）に、農林省委託の「甘藷生産改良増殖事業」の試験地として、当時の島尻郡小禄^{おろく}村（現在は那覇市）安次嶺に設置された。現在は那覇空港のフェンスの中になる海上自衛隊那覇航空基地から、道をはさんで高良オートバックスのある辺りにかけての^{一帯}が、かつての小禄試験地跡だったらしい。

昭和12年（1937）、小禄試験地はアルコー

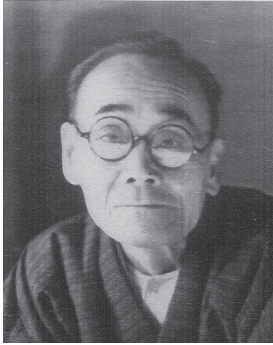
ル原料用甘藷生産という特命をもつ指定試験地として再出発する。12年といえば、日中戦争が勃発した年である。この時期、さらなる戦争の拡大に備え、航空機燃料用としてのアルコールが重視されたが、その原料となるサツマイモの増産が強く求められていた。農林省はこれに応えるべく、小禄試験地を発足させたのである。

小禄試験地の研究員数は7名ほど。敷地面積は2.3ha、うち1.2haが試験圃場、周囲にモクマオウの防風林を巡らせた簡素な試験地だった¹⁾。今でこそ空港の拡大とともに、この辺りも整備されてきたが、昭和初年には、サツマイモ畑と湿地がつづく辺鄙なところだったという。

沖縄戦にくわしい人なら、ここに海軍航空隊の飛行場があったことを知っているだろう。飛行場は昭和19年（1944）10月10日の最初の^{大空襲}で徹底的に叩きつぶされるのだが、近くに^{あった}試験地も、そのそば^{づえ}を食って^{跡形}もなく破壊された。

飛行場は今では那覇国際空港となり、年間1400万人もの乗降客があるというのに、小禄試験地はそのまま歴史の闇に消えてしまった。その幻の試験地の初代主任が松永高元^{まつながたかもと}だったのである。

松永は鹿児島市の生まれ。鹿児島高等農林学校卒業後、大正5年（1916）に沖縄県農事試験場に^{技手}として着任した。大正14



松永高元

年（1925）、技師に昇任、同時に種芸部長となり、翌年から國がはじめた甘藷改良増殖試験事業の中で、内地向け品種の人工交配を担当した。

昭和12年（1937）に農林省指定試験地が小禄に設置されると、松永は試験地主任に任じられ、14年（1939）にサトウキビ育種への配置換えで余儀の本場に移るまで、小禄で過ごした。昭和18年（1943）に、結核が高じて鹿児島に帰るが、通算して27年間、沖縄農業に貢献した。ちなみに指定試験地主任の後任には、のちの九州農業試験場作物第2部長井浦徳が就任している。

「沖縄100号」の誕生

「沖縄100号」が誕生した直後の昭和9年（1934）に、小禄試験地の活動状況を紹介した記事²⁾が残っている。雑誌『農業』に掲載された短報だが、これによると昭和元年（1926）の農林省委託甘藷生産改良増殖事業発足以来、9年までに交配した花の数は12万花以上、得た種子の数は2万6000、選抜試験で扱った新品種^{いちらとく}の数は1万5000以上、うち全国各地の農事試験場に育種用として配布したものは約3500種に達するという。たいへんな仕事量だが、その中心にいたのが松永である。今と違って温室

などろくになかった時代のことである。またともに花が咲き、自然状態で種子のとれる沖縄は、わが国のサツマイモ人工交配育種にとって不可欠の場所だった。小禄はその拠点であり、松永はそのキーマンだったのである。

小禄での松永のおもな業務は内地の試験場にサツマイモの交配種子を届けることだが、同時に沖縄県向け品種の育成に力を注いでいる。じつは「沖縄100号」はこの沖縄向け品種のひとつだった。交配は昭和3年（1928）、両親は「七福」×「潮州」だった。

前出の『農業』の短報には、小禄で育成したばかりの「沖縄100～105号」の紹介もあるが、「沖縄100号」の部分だけを抜粋すると、以下の通りである。

〔特徴〕 在来の常食品種に比べて収量が多く且つ熟期が非常に早くて常食に適する優良品種である。

〔収量〕 5ヶ年平均の春植反当収量は865貫（3244kg）で、これまでの奨励品種「沖縄1号」に比べて総収量で3割3分、上諸の収量で5割2分の増収を示して居り、植付後80日の早期収穫の成績は反当492貫（1845kg）で沖縄1号より29割7分も多く非常に早生である。

〔特性〕 イモは紅色楕円形で浅い縦の溝があり、黄肉粉質で試食点は「沖縄1号」の50点に比べて86点と食味良好である。

以上からもわかるように、「沖縄100号」は最初県内の早堀り用として期待された。だがふたを開けてみると、その抜群の多収性が買われ、全国各地で爆発的に栽培された。なにしろ世は〈1億総腹ぺこ時代〉である。多収がすべてに優先したが、「沖縄100号」はその条件ぴったりの品種だっ



「沖縄100号」

た。昭和10年ころには、この品種で2000貫(7500kg) /10aをあげた農家もあらわれ、さらに栽培熟をあおる結果になった³⁾。

「沖縄100号」は内地でつくると、食味不良で、肥大すると条溝が目立ち、外観もよくない。だが、そんな欠点がまったく気にならないほど、当時の国民は飢えていた。「沖縄100号」はそうした日本人の飢えをしのぐ、かけがいのない食料だったのである。食料事情の悪化とともに作付面積を増し、ピークの昭和21年(1946)には、全国で最高8万haにまで達している。現在のサツマイモの全国作付面積が全品種合わせ

て4万ha強だから、その2倍を1品種で占めていたというわけだ。

松永が手がけた品種数々

松永の手をわずらわせた品種は「沖縄100号」だけではない。農林水産技術会議事務局編の『指定試験事業50年史』⁴⁾によると、彼が在籍した大正15年(1926)から昭和13年(1938)までの間に、小緑から各地の試験場に送られた種子から育成された品種多いが、そのおもなものをあげると、「農林1号」(千葉農試、昭和17年育成)、「農林2号」(鹿児島農試、17年育成)、「護国諸」(三重県農試、13年育成)、「高系4号」(高知県農試、20年育成)などがある。ただし「護国諸」と「高系4号」は、昭和7年(1932)に松永が交配した「元気」×「七福」の系統群中の同一系統である。

図2に、昭和22年(1947)のサツマイモ品種別普及状況を示した⁵⁾。全国で34万4550ha栽培されていたが、その61.2%を育成品種が、24.8%を在来品種、13.9%が品種名不詳の雑品種が占めている。品種別

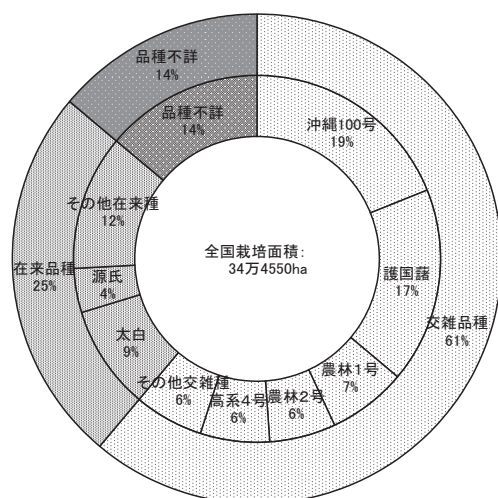


図2 昭和22年の品種の普及状況

にみると、この年も「沖縄100号」の6万4822ha（18.9%）が最高で、以下「護国諸」5万9552ha（17.3%）、「農林1号」2万4056ha（7.0%）、「農林2号」2万0125ha（5.9%）とつづく。いずれも小禄試験地で、松永が手がけた品種である。

この時期のサツマイモの品種改良に、松永の果たした役割の大きさがわかるだろう。

北村秀一場長と『ざわわざわの沖縄戦』

ここで少し脇道にそれ、松永の直属上司であった沖縄農試北村秀一場長について述べておきたい。松永は場長を助ける次席の地位にあり、個人的にも二人はごく親しかったという。

じつは以前、「沖縄100号」についてある新聞に書いたところ、それを読んだひとりの紳士の訪問を受けた。元日本銀行検査役の北村紀雄氏、北村秀一場長の次男で、松永のご子息とは遊び友だちだった人である。小禄試験地は彼らの遊び場だったそうで、在りし日の試験地の姿を網膜に留めている数少ない人のひとりである。小禄試験地について、いろいろ思い出を語ってくださったが、私の心に突き刺さったのは、そのときうかがった父上北村秀一場長の話である。

北村秀一場長は兵庫県の生まれ。東京帝国大学農学部農芸化学科を卒業、農商務省農事試験場に入り、麻生慶次郎・大工原銀太郎両博士に師事した。沖縄の土を踏んだのは、昭和6年（1931）。沖縄県糖業試験場農芸化学部長として赴任した。

糖業試はまもなく農事試に併合されるが、昭和14年（1939）、彼はこの農事試験場長に就任する。戦争が沖縄に迫ると、内

地出身の職員はつぎつぎ離脱するが、彼は持病に重い胃病をもつにもかかわらず、敢然任地に留まった。沖縄戦がはじまると、公務員として知事を助け、昭和20年（1945）4月の艦砲射撃で至近弾を浴びて亡くなるまで、その職にあった。

太平洋戦争は農業研究にも多大の損害を与えたが、試験場長の職責をまっとうし、殉職した人はこの人をおいてないのではなかろうか。「沖縄100号」はこうした農業研究者の尊い犠牲を背景に生まれた品種でもあることを、ぜひ記しておきたい。

なお、非業の死を遂げた北村が現役時代どんな研究をしたのかを知りたくて、いろいろしらべてみたが、なにもわからなかった。すべてが灰に化したのだとすれば、残念である。

北村の最期を記した本に、田村洋三『ざわわざわの沖縄戦』（光人社）⁶⁾がある。沖縄戦に巻き込まれた島民の悲惨な体験を綴った力作だが、なかでも北村場長には多くのページが割かれている。上記の北村に関する記述は、この本に拠った部分が多いことをおことわりしておく。

じつは、この『ざわわざわの沖縄戦』にも松永は登場する。試験場でサトウキビ移植のアルバイトをした人からの聞きとりだが、つぎの1節がある。

「僕らがもたもたしていると、“松永タンメー”とニックネームを付けていた老技師が現れ、指導してくれました。タンメーと言うのはお爺さんをウチナーグチで呼ぶ言葉ですが、全く老人然とした人でした」やはり松永は育種一筋の人だったのだろう。

その後の松永高元

松永は昭和18年（1943）に郷里の鹿児島に帰った後、戦後しばらく鹿児島大学種子島農場の講師をつとめた。温厚な人柄で、いつも地下足袋・作業衣姿で畑に出ていたという。ここでもサツマイモの品種改良に取り組んでいたそうで、根っからのイモ研究者だったのだろう。

昭和27年（1952）に鹿児島大学を退職、以後、宮崎市に移る。宮崎では一時、宮崎県農業試験場の図書室に臨時職員として勤務していたという。

飢餓の時代には日本国民の命綱だった「沖縄100号」も、食料事情が好転すると、あっという間に消え失せてしまった。そしてそれと同時に、この品種をつくった松永も世間から忘れられていった。

昭和40年（1965）、松永高元は黙々とただ研究一途に生きた72年の生涯を閉じた。もはや食料難など遠い昔に去ったとはいえ、その克服の最大功労者であった彼を知る者にとっては、なにかさびしい葬儀であったという。

引用文献

1. 農林水産技術会議事務局編 1979 指定試験事業50年史
2. 新里順正 1934 沖縄県に於ける甘藷の新品種 『農業』649（12）：110～112.
3. 宮本常一 1962 甘藷の歴史 未来社
4. 農林省農業改良局研究部 1951 沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要
5. 農林水産技術会議・日本農業研究所編 1970 『戦後農業技術発達史（第3巻畑

作編）』日本統計協会

6. 田村洋三 2006 ざわわざわわの沖縄戦 光人社

* Nishio, Toshihiko PhD

1931年生 農学博士 農水省局長などを歴任「昭和農業技術史への証言 第1～6集」など著書多数